

## 書 評

浮田典良・加賀美雅弘・藤塚吉浩・呉羽正昭編：  
『オーストリアの風景』ナカニシヤ出版，2015年  
7月刊，188p，2,200円（税別）

2005年1月，76歳で亡くなられた元京都大学名誉教授の浮田典良さんが『スイスの風景』（ナカニシヤ出版，1999年）の姉妹編として意図していたものである。先生が亡なられて，弟子の藤塚氏が先生のワープロに残されていた遺稿に，不足部分を加賀美・呉羽両氏の助力を得て完成したものである。

本書はI部でオーストリアの概観14章，II部で取り上げた市町村71章からなっている。各章は見開き2頁からなり，4枚ほどのカラー写真が挿入されていて，楽しく，また読みやすい。I部でユニークな章は，「ホテルと民宿」・「カフェ」・「料理」・「ビールとワイン」などである。ウィーンのカフェは筑波大学大学院地域研究研究科修士論文のテーマになるほど文化となっている。II部はオーストリアの9州から，各州4～11の観光地としてふさわしい市町村を取り上げて解説してある。州の最初の頁には半頁の州の地図が載せてあって，観光地の位置関係を知らせてくれる。

学術書としてはMartonne, E. (1926) : *Les Alpes, Paris* や，バイブルとなっている Krebs, N. (1961) : *Die Ostalpen und das heutige Österreich*, 2 Bde., 3. Aufl. Darmstadtがある。東大名誉教授 坂口 豊 (1973) : 『ウィーンと東アルプス』（古今書院）のネーミングはKrebsにあやかっただけのもの。G. グラウエルト 佐々木博・石井英也・桜井明久訳 (1980) : 『アルプス—自然と文化—』（二宮書店）もある。

市販の観光ガイドブックとの違いは，取り上げ

ている観光地が小さな場所であり，地理的に意味のある場所を取り上げており，記述に執筆者の個性が感じられる。II部71章にはローカルな地図とホテルは掲載されていないので，本書を持って現地をすぐに歩けるわけではないが，高度な旅行計画を立てる際のルートや地域選定には役に立つ。

本書は「オーストリアの写真観光地誌」であり，浮田先生執筆の章は「オーストリアの写真旅行記」ともいえ，浮田先生流のホテル代などの記述があるが，1シリングが何円なのかを記してくれると安いか，高いかの判断が出来る。

1963年，フライブルク大学夏学期の上級ゼミナール「オーストリア」で15回，学生の発表を聴いた。自然・鉱工業・農業・首都ヴィーン・観光などの項目で，学生の発表レジュメに対して教授が〇〇の論文を読んでいない，などと指摘されていた。テーマの展開は学生の自由で，テーマを貰うとその勉強に図書館詰めとなっていた。夏季休暇に入ると，バスで「18日間のオーストリア巡検」。毎日の教授の説明などを交替で学生が記録Protokollして，巡検後全員がそれを保持する。

猛暑の日本の夏を避けて東アルプスの国で過ごす計画を立てる際に，是非読んでいただきたい。

（佐々木 博）

橋本雄一編：『QGISの基本と防災活用』古今書院，2015年10月刊，192p.，2,700円（税別）

私のような一介の高等学校の地理の教員にとって，このような書評をさせていただくことは身に余る重責であり，恐縮の至りである。が，次期学習指導要領にての高等学校地理必修という中で，この書はその“追い風”として大いに期待できる